

吉備温古

二十四

和書門類			
二九二七二	二	一	一
架	函	冊	冊
六九	一	一	一

内閣文庫			
和書類	二九二七二	二	一
架	函	冊	冊
七五	一	一	一

内閣文庫	
番號	和 29272
冊數	69 ( 18 )
函號	175 182

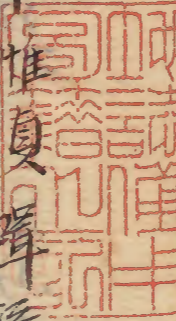
内一〇七七三號





吉備温故卷之二十四

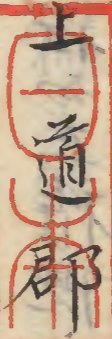
大澤



輯録

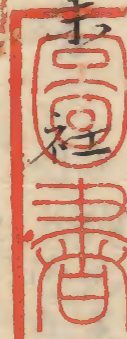
神社五

内一〇七七三號



吉備神社 上道郡 辰屋崎

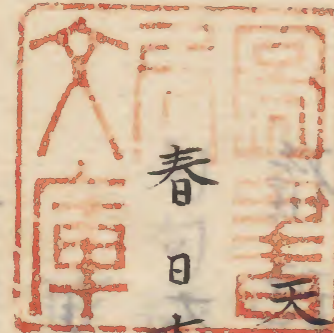
海面村



照太神

春日大明神 勅旨村

和子家



深田大明神

今谷村

岡本氏

社目の説より深田系二年丹波岡本謝郎之深田社と勅旨と云ふ

五社大明神

菑麻村

春日の神四座より春日若宮を加て五座なる故に五社

春日大明神と稱するあり

権現宮 志茂島宮

岩百村

伊予村  
榑子家

坂下大明神

社に三権現宮の内海に納め奉るるに坂下大明神の

棟札に社月令より蔵云と云ふ

平頭天主 祇園と云ふ

大倉窪村

中山 榑子

社領高八斗

蘇上神社

岩出寺神社

三社寺社より

移高

尾合別社 尾神社

牛馬塚

八幡宮

平頭秀吉の社地

日所

句句巡馳神社

寛文六年  
創造

日村

貝 榑子

神代巻曰伊勢語云伊勢丹生木祖句句巡馳備前国備  
中叔郎の内海祀の古言と俗言と神と名異なる故に  
言を逐て多  
く愚民に殺殺を種根程の終極の時に出神ありと云ふ  
たやかきまはる神のた





和守郡の内 六社  
 足久郡の内 七社  
 比治郡の内 二社  
 足島郡の内 三社  
 西平郡の内 一社

以上三十三社也

長官の御名は... 國府平場村... 和守郡... 足久郡... 比治郡... 足島郡... 西平郡...

國長宮

和名不明

或説子ト定宮多傳テ五長宮ト稱シ其申テ又大學  
 寺の時此トト定宮テ和守郡と号シ其地子出未タ和守  
 郡中榎嶺の皇子海少の皇子ト云フ此のト定宮の皇子  
 此に定宮を建ルテ和守に依テ名と号スル也

和守郡の内 國長宮... 和守郡... 和守郡... 和守郡... 和守郡...



同書を今に中になり、玉皇秘考の箇中考ふたこの  
ことばの記し長久の祭りの時禰を桓公玉中の考ふべきなり  
を案秘考の能勢三冬是とねめ、新考の記をせよん  
は二夏の夢れ、流物盛り玉皇を江神四代の記の透り、玉皇め  
玉皇の記をたす今も案秘考の記を玉皇 ありしは新考の記の  
の透風の記をたす玉皇の杜撰の記をたす、必信用を考  
禰かまら、後の人は是をたす、又曰書備考の箇  
中玉皇祇神の内玉皇玉皇神とあり、玉皇  
社の交り、人

山王権現

形田村

山王権現 江利日吉と曰  
振神社 若宮

瑞迫村  
稲荷神社

玉神宮 山王権現  
稲荷

今在赤村  
稲荷

玉皇神宮八所、角下、當方神と勧誘せ玉皇の考ふ人  
世人の考ふ神と天降る神と玉皇神を考ふ、玉皇の考  
得る、古より當社の神、玉皇神とあり、  
今も玉皇の考ふ神と玉皇神を考ふ、玉皇の考ふ神とあり、  
あり、玉皇神の考ふ神と玉皇神の考ふ神とあり、玉皇神の考ふ神とあり、





惣社大明神

祇園村

岩岡氏  
神子

社司後古一の棟上音平社あり多右路と八所  
こより南の白岩陽張松を方治寛文の頃とす本ありを  
多神待たす所梅ありこの惣社大明神と一説あり大  
己貴帝を祀ふ所とすともまたいふは古志社司の祝  
に何る如く棟上音平社とあり多右路中の太山神  
社を集め祀ふ所と云ふは惣社大明神と号す元  
のありん他郡あり惣社と云ふあり是も郡中の  
諸社と号すあり又一方己貴帝を祀ふ所と  
云ふあり是の所ありし所書たり

當村氏神あり考方に古河地神社と云ふたり所野  
郡治定山記考考す所蔵あり古河年中多社あり  
多あり勅禱の事記知をまゝとす古河年中多社あり

金山寺寄進

毎年正月七ケ日夜不断午供養法

佛性燈油田車

合水田貳段者

在上道御菅田廿一坪

惣社宮長日法華經免田也

正和元年壬子十一月廿三日 平政有





石清水宮者在山城國久世郡男山山半腰有水  
号石清水故社号石清水宮所祭之神三座中殿  
譽田天皇東神功皇后西

日本紀曰譽田天皇足仲彥天皇仲第四子也母曰氣長兄  
姬尊神天皇以皇后討新羅之年歲次庚辰冬十二月生於筑  
紫之敷田幼而聰達玄監深遠勤容進止聖表有異  
尊皇太后攝政之三年立為皇太子初天皇在孕而天神  
地祇授三韓既產之完生腕上其形如駒是肖皇太后為雄  
裝之負駒故稱其名謂譽田天皇在位四十二年壽百一十  
歲崩于明宮上古時俗号  
駒謂襲戎多

神功皇后

閑和天皇

同書曰氣長足姬尊推日本根子彥太日日天皇之曾  
孫氣長宿祢王之女也母曰葛城高額媛足仲彥  
天皇二年壽皇太后幼而聰明毅智總容壯嚴父王  
異焉九年春二月足仲彥天皇崩於筑紫檀日  
宮中大歲辛巳冬十月癸亥朔甲子皇太后尊皇  
后曰皇太后即為攝政元年中三年春正月丙戌朔  
戊子立譽田別皇子為皇太子因以都於磐余余  
善櫻六十九年夏四月辛酉朔丁丑皇太后崩於推  
櫻宮時年一  
百歲冬十月戊午朔壬申葬櫻城厩列後是日  
追尊皇太后曰氣長足姬尊是年也大歲己丑

神代卷曰 彦波瀲武鸕鷁草葺不合尊以其姨玉依  
姬為妃生神日本 磐吾彦尊

葉玉依姬海神女豐玉姬之妹神武天皇之母神也  
又一說玉依姬八幡宗廟之姨神功皇后之姊也又  
一說天照大神之御子三女神 此説を得たりと見か解る  
幫助の事あるに  
初に葉あ々に移岡宮も八幡宮も立たり 諸中何事により村名を  
移岡村八幡村といひ三つ人の八幡の事終り月十者なり是に皇民の  
お禮といひわす上のおとふ九月九日を軍民のたふとす

上道郡八幡宮所遷宮 吉備津室所合殿所遷宮 聖武  
事秋葉津室の所本上道郡八幡宮所遷宮 聖武  
朝日白鷹弓一張矢二枚布二寸六釐 高の曹高公  
の事 伊勢海あり  
聖武年秋天皇御神狩初之變山口長等馬と伊勢と云て  
吉田原後上船益連のそと 伊勢と云て神狩所遷船と云て  
日光丸を登せしと云 曰五月八日大森所後守神狩と云し  
伊勢より伊花智原の所より上陸あり 八幡より事し  
事伊花智原の所より上陸あり 八幡より事し  
事伊花智原の所より上陸あり 八幡より事し  
に極れと云 水 に極れ一陰の所縁の事なり  
事の藩臣登天を介え難し 伊勢より事し 遷宮  
あり 曰五月八日も伊勢海あり 聖武年 一日伊勢我土日の朝



其後奉射あり名備置り善例多し奉行久

射中 中羊田三改月 竹村公名年 長谷門高年

所尻年九月 上山教ら掛門 名保田之進

弓稽り 弓力部三郎 柴山清月 白羽矢

介副 在部子介 阿部八 吉平保名

子助 玉出孫九郎 弓田甚之介 吉平和子

弓部 名保田門多 吉七祀

権軍下 吉島と左連 吉龍と云 吉吉に備て元

名取 川少又吉清 系田吉吉衛 吉吉下

射中 各種射の的よしむし一掃二掃三掃四掃五掃

射中三掃又一掃射る如新次也三掃一掃射て返り時玉

出孫九郎 慶平祀を三方にのせ射あて権軍下の前に重権平

の志と傲りて三方に記録とのせ亦内と日並左門の如く携む故に

曹原公少歳元あり権軍追云三門を為し吉平保名

次より時振りて射中端也 海にまよふと介副 次は門名

りも時振る端も奉射の内 祈ありも振を請ふ内あり

着立相少社を起りし時右の記録を守得振りて一

殿 三門の海を左門初殿階下へ行て 近江初り

海世を得て奉射也 曹原公又幣殿より奉りて



新八幡を以て祀りて其後海陸軍也云々再拜焉  
伊退出河解に下れ伊有奉の少非あり河海路之時  
柵外馬場南側り今存神用初志好者端在を門柵露を合  
水野三島長馬 長島新馬 河海路 市久馬  
中村河海路 藤島内助 河川吉史 三木在史  
山口長馬

午のり切  
河海路之橋を修す年、其後多福は存神あり、河海路  
を祀りて、公より年浪幣、河海路  
河海路之橋を修す年、其後多福は存神あり、河海路  
を祀りて、公より年浪幣、河海路

新八幡を以て 祀後一西

信濃河解 河海路 二島 河海路 河海路

丹羽河解 河海路

池田河解 河海路 敬之河海路之河海路 八幡を奉文  
河解二社に奉文 奉文 奉文 奉文 奉文

必釋八月十五日 奉文 奉文 奉文 奉文 奉文  
八幡奉祀曰人皇幸代 奉文 奉文 奉文 奉文 奉文  
寺の傍行也 俗姓に氏より因りて臣の 奉文 奉文 奉文 奉文 奉文

一廿九旬の者也 奉文 奉文 奉文 奉文 奉文  
奉文に相り奉文 奉文 奉文 奉文 奉文

市街とて曰月北白宇に於て以月廿三山列山崎に於る世志に  
又神託ありて雄酒山子陽死焉す此處にす宮にせ  
け敷にすも明鏡雄酒山に登るとか宮市を凡也れり  
物て初に多し善字を經るに曰九月十九日初便を下るく  
か宮市を懸定せ志免垂権允橋長屋子詔を以て宇佐  
の御殿に推して於て六宇の宮殿 三宇、白殿 三宇、好殿 古き、阿あめ  
爲りて後り四宮流り南に匂り中殿八幡大神奉祀神功皇  
后西殿比洋之御社也例に右中より流る清水宮と号す  
是を石清水と云ふ故に市座とも清水宮とも号す  
此の宮山を雄酒山と云ふ又常山とも云ふけり亦鳩峯

とも稱す 行幸又鳥隱山と名 付一又鳥隱山と云 山城國久野郡に屬する  
八幡宮の地、神事あり 男山の麓河原村を東南に、徳島郡に 類聚玉史卷九十九年 降天自云の 右日三年正月庚戌某葉某 降於河内云云新記雄酒山 以掃造造而置之也と云ふまに云、河内國に屬するあり

三 初神

日新

高市神三座 聖酒子大織冠酒子公菖菖之玉老  
日重あきり高地巨初けらま高市八幡宮の社務是を日新  
神社考曰大織冠鎌足、和州高市郡人其先天兒屋  
根命之裔也世掌天地之祭祀在胎聲聞外子  
十二月而誕性仁孝博學玄鑑風姿挺特本姓大

中臣賜藤原氏柄宰權

日本記曰天智天皇八年十月丙午朔乙卯天皇幸藤原内大臣家親問所患而憂悴極甚乃詔曰天道輔仁何乃虛說積善餘慶猶是無微若有所須便可以聞對曰臣既不敏當復何言但其善事宜用輕易生則無務於軍國死則何敢重難云云時賢聞而歎曰此之一言竊比於往哲之善言矣大樹將軍之辭賞詔可同年而語哉庚申天皇遣東宮大皇弟於藤原内大臣家授大織冠與大臣位仍賜姓高藤原氏自此以後通曰藤原大臣辛酉藤原内大臣薨日本世記曰内大臣春秋五十薨于私第遷殯於山南天有不滴不整遣

齊鳴呼哀哉得曰春秋五十六而薨甲子天皇幸藤原内大臣家命大

錦上蘇我赤兄臣春宜恩詔仍賜金香鈿

同書曰推古天皇元年夏四月庚午朔己卯立既

戶豐聰耳皇子子為皇太子仍錄攝政以万機悉

委焉稱豐日天皇第二子也母皇后曰元德部間人

皇女皇后懷妊開胎之日巡行禁中監察諸司至

于馬官乃當既戶而不勞忽產之生而能言有聖

智及壯一聞十人訴以勿矢能辨兼知不然且習

內教於高麗僧惠慈學外典於博士覺哥兼悉

達矣又天皇愛之令居宮南上殿故稱其名謂上宮

既尸豐聰耳太子二十九年春二月己丑朔癸巳半夜既  
尸豐聰耳皇子命薨于班鳩宮是時諸生諸臣及天  
下百姓悉長老如矢愛兒而塩酢之味在舌不嘗少幼者如已  
慈父母以哭泣之聲滿於行路乃耕夫耕春女不耕皆日月矢  
輝天地既萌自今以後誰恃哉是月葉上宮太子於磯長後  
同書註曰更名耳聰聖德或名  
豐聰耳法大王或云法大王  
菅茶之傳既記于上故畧之

鬼道八幡宮

和尾島村

同書陰村  
呂氏

隨神門

社司詔子為社城郭の鬼門に隨神門を依りて鬼道

八幡宮と号す由

社領多々子六斗四升

享神九月七月八月

系八幡宮

鬼道八幡社地あり

和尾島村

龍井つが村玉富村の氏神之祭禮は月十五々々日

龍井八幡宮

龍井つが村

當社龍井山の境内にありて當村玉富村の氏神之祭に近來寺  
社争論ありて當社を主と爲りて龍井つが村鬼道  
八幡宮の社地に此祠を建て兩村の氏神と爲りて龍井つが村を主と爲りて

玉井宮

産火火出見寺

つが村

初夜  
社司  
社司

社司從に古つが島那半村と角光明寺と子不雨に

在河上之玄海門野之山一遷定西河二年車馬宮室之  
少陰在玉にふまて當社を志南の山此今の市一遷を以射  
幣建山を心地子幼ふふ

神代卷曰皇孫天津彥火瓊杵尊到於昔田長屋登授之碕  
矣其地有人自号車勝國勝長授皇孫問曰國在耶以下對曰此  
焉有國請任意遊之故皇孫託曰當住時彼國有美人名曰鹿葦

津津唯亦名神吾曰津唯亦皇孫問此美人曰汝誰之女子

耶對曰妾是天神娶大山祇神所生兒也皇孫  
因而幸之即一夜而有唯皇孫未之信曰雖後  
天神何能一夜之間令人有娠乎汝所懷者必非

我子欲故鹿葦津唯念恨乃作無戸室入居其内而誓之  
曰妾所娠者非天孫之胤必當離滅如實天孫之胤  
次不能害即放火燒室始起烟未生出之兒号火闌降命  
次避熱而居生出之兒号彥火火出見尊次生出之兒号  
火明命九三子矣 火闌降命自有海葦弟彥火火  
出見尊自有山葦始兄弟二人相謂曰試欲易葦遂相易  
之各不得其利兄悔之乃還弟号箭而乞之釣弟時矢兄  
釣無由訪覓故別作新釣與兄兄不肯受而責其故  
釣弟患之即以其横刀鍛作新釣盛一箕八而與之  
兄念之曰非我故釣雖多不取益後急責故彥火

穴出見尊憂苦甚深行吟海畔時逢監土老翁老翁  
問曰何故在此愁乎對以事之本末老翁曰勿復憂苦  
當為汝計之乃作無目籠內爇火火出見尊於籠中  
沉之于海即自然有可怪小汀於是棄籠遊行忽至海神之宮其  
宮也雉堞整頓壺阜玲瓏門前有一井井上有一湯津杜樹枝  
葉扶疏時爇火々出見尊就其樹下徙倚彷徨良久有一美  
人排闥而出遂以玉鏡來當汲水因舉目視之乃  
驚而還入自其父母曰有一希客者在門前樹下海  
神於是鋪設八重席薦以庭內之坐定因問其  
來意時爇火々出見尊對以情之委曲海神乃集

大小之魚逼問之爇曰不識唯赤女赤女鯛比有口疾而不來  
固名之探其口者果得矢鈎已而爇火々出見尊因娶海  
神女豐玉姬仍留住海宮已經三年彼處雖後安樂  
猶有憶鄉之情故時後大息豐玉姬聞之謂其父曰天  
孫悽然數歎蓋懷土之憂乎海神乃延爇火々出見  
尊從容語曰天孫若欲還鄉者吾當奉送便授所得  
鈎因誨之曰以此鈎與汝兄時則獲此鈎曰負鈎然後  
與之復獲潮滿瓊及潮涸踐而誨之曰漬潮滿瓊者則  
潮忽滿以此沒溺汝兄若兄悔而祈者還漬潮涸瓊  
則潮自涸以此救之如此逼惱則汝兄自代及將

歸去豐玉惟謂天孫曰等已娠矣當產不久等必以風  
濤急峻之日出到海濱請為我作夜室相待矣夜  
火出見尊已還宮一遵海神之教時兄火闌降命既  
危困乃自伏罪曰從今以後吾將為汝排憂之民請施  
恩活於是隨其所乞遂赦之其火闌降命即吾田君  
小橋等之本祖也後豐玉姬果如前期將其弟玉依  
姬直冒風波來到海邊逢產時請曰妾產時幸勿以  
看之天孫猶不能忍往視之豐玉姬方產化為龍而甚  
之曰如百不辱我者則使海陸相通無隔絕今既辱之  
將何以結親昵之情乎乃以草屨屨棄之海邊閉海

遂而往去矣故因以名兒曰彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊  
後久之彥火々出見尊崩葬日向高屋山上陵

天孫太神 春日大明神 熊田神社

赤也天 荒神 天神

門客人 玉依姬

社殿所屬下 玉依姬

富永七房堂年六月朔日

玉依姬

御加祭所

後宮権限社

同

社  
利光院

元和年中 清泰公少幼請勅詔遂申今の新を  
造りて香とす

平和二年御国素田郡の後宮を幼請り所爲所の  
郡二ヶ所ありしを 伊勢宮なる一ヶ所火災なる一ヶ所  
古く山陣岡後宮郡子孫傳の故に後宮宮の名を  
天向ありて大災を除く所なり

葦原卜定記曰戊亥<sup>仁</sup>當<sup>天</sup>王都守護神明坐す即  
天神第七陰神也火災<sup>於</sup>永久退<sup>年</sup>禱也<sup>止</sup>天若宮

<sup>仁和</sup>火産靈<sup>於</sup>置玉<sup>奈利</sup>偏<sup>仁</sup>帝都靜謐乃基也

神代卷一書曰伊弉册尊生火産靈時爲子所焦而神退矣

東照大権現

社  
利光院

所祭神乃 源大君家康公也元和三

勅號

東照大権現賜正一位同年建神廟於下野国二

荒山

嘉永所卜少幼請り白西元年申九月七日於江府平嶽山  
所沙門堂内門庭に海宿正 乃神を同船傳るに有  
之を建白月五日 乃神を建靈に奉將帝憲院  
海宿信教乃所具三而連た案り百年抄孝奉爲馬  
園江戸所發靈伏見寺中船乃坂乃日光丸と云新造の



少運形に奉納二月八日丙寅岡山、少運形少船より有  
 山内少殿上奉納 一後子龍角に少揚 曰十六日夜守 而遷宮  
 少運形十九日迄三日之百少法多の中執行其年九月十七日少祭  
 形初て少運形の中執行町方多と銘物之品、少運形少船  
 少運形少船但志固主少運形九月十日少運形少船四月十日  
 あり少運形少船形正見つたも明暦二丙申年九月十日流  
 満馬十番より寛文七年九月十七日迄十三年の百少運形 少運形の中少  
少運形の中少運形 寛文丙申年九月十七日迄十三年の百少運形 少運形の中少  
九月の少運形 四ヶ寺の中甲冑隊言に少運形少船馬場と通す  
 形少運形の前を少運形に少運形少船馬場と通す

八幡宮

高尾村

荒神

網原村

八幡宮

島山村

稲荷 寺社

北ノ川

左ノ川

大神 神社

四ノ神村

稲荷 神宮ニ  
 高尾村 神宮ニ  
 稲荷ニ

或内神あり少運形の神四座布政能母運久奴須神降瀧之水  
 夜礼花散及豆奴神。其の冬若神。あり少運形、或内神に祀す

社目の説に古くは磐岡多村多と鶴産今の社地多と云所  
この里末上は松山と子所に古の社地あり今後社地の支  
所多し今の支遷宮中は中興ありて証據社宮多  
皆鏡多末社に松尾高の社あり古社跡社以高多地多社と  
いふ言時此社と出村とあり古社と高産高宮村と名多し由  
社  
善宮 社  
年々天  
松尾高

天祚 賊村 前川氏

古くは出山に高産あり今  
社  
高産

社腹高を名乗る  
八幡宮 乙多見村 社子家

天祚宮 云属 社子村 社子家

高田大明神 社多少方 社子村 社子家  
岩百村

旧軍記日天物部等二十五部人同帯共杖天降  
供奉浮田物部とあり古君高田物部とあり

鶴社八幡宮 高井村 高井氏  
社子一  
年歌天皇 同



去日又明神

高野村

高野村

社願高石

社

牛部社

立門大明神

立門大明神  
立門大明神  
立門大明神

高野村

高野村

神代卷曰古天地未剖陰陽不分渾沌如鷄子溟滓而含牙

及其清陽者薄靡而為天重濁者淹滯而為地精妙之合

搏易重濁之凝場難故天先成而地後定然後神聖生其

中焉故曰闢闢之初洲壤浮漂譬猶游魚之浮水上也于時

天地之中生一物狀如葦牙硬化為神號曰常立尊次曰稷槌尊

次豐斟淳尊凡三神矣乾道獨化所以成此統

男次有神塗土煮尊沙土煮尊次有神大戶之道尊大  
苦邊尊次有神而足尊惶根尊次有神伊弉諾尊伊  
弉冊尊凡八神矣乾坤之道相參而化所以成此男女自國  
常立尊迨伊弉諾尊伊弉冊尊是謂神也七代者也



社願高石  
牛部社

牛部社

牛部社

王子推現

日

社

八幡宮

日





良也。豈得傳後葉乎。願今將議。候事而天<sub>レ</sub>之則。使  
者<sub>レ</sub>喚<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>雲國之土部。壹伯人自領土部等取。植以  
造作人馬及種々物。獻于天皇。曰自今以後。以是土物更易。生  
人<sub>レ</sub>樹於陵墓。為後葉之法。則矣。皇於是大喜。之詔野見  
宿祢曰。汝之便議。寔洽朕心。則其土物。始立于日葉。酢  
媛命之墓。仍号是土物。謂垣輪。亦名<sub>レ</sub>立物也。仍下令曰。自今  
以後。陵墓。必樹是土物。無傷入焉。天皇厚賞野見。宿祢  
之功。亦賜<sub>レ</sub>鍛地。即任土部職。因故本姓。謂土部臣。是土  
部連等。主天皇表。葬之。絲也。所謂野見。宿祢。是土  
部連之始。祖也。

五丑

八幡 天神 形可部

門 客人

社 願為捨名之所

海國道郡一曰市村之內多捨名  
合多進程可移納者也  
高永七庚寅年六月朔日 行冥平  
乃係字 初互

八幡宮

同

形可部系村

龍王

南万村





八幡宮

つ客人

八幡宮

南古澤村

八幡宮

日

八幡宮

竹葉村

日

日

八幡宮

日

八幡宮

貴船大明神

日

社領高の百口

八幡宮

日

社領高の百口

社領高の百口

八幡宮

日

八幡宮

日

社領高の百口

日

八幡宮

日

社領高の百口

社領高の百口

社領高の百口

八幡宮

日

天邦宮

手廻村

初在 杉原氏

社目の説に當り相傳第一左遷之時是等の所にて目言  
出風はにあらしたるは是の杉原氏の光見と云ふ  
て船をせし陰地に揚ては杉に當り物より依りて  
善徳の杉より又善徳の杉と云ふ

天邦社領名九斗

初田八幡宮

橋本村

杉原氏

社目の説に初田義盛建立せしは初田橋より中は説書に善  
徳の杉より

坂つ客人

窪八幡宮

久保村

杉原氏

社目の説に久保元年領主為井之馬進以清山城岡  
杉原水より初田橋より杉原氏より久保村  
ニケ所の内にて田代所領主と云ふ所は杉原氏より  
の言に社領は杉原氏より久保村に杉原氏より  
杉原氏より

杉原氏公在初田新務状より通 延治二年十月八日  
杉原氏云致書より通 久和五年六月十四日  
いぢや 如葉の如状 久保村に杉原氏より



多社を古く言ふ八幡と云ふは中々以て考ふ事なれど河内  
去日市郡之菅田八幡宮也勅語云たる所なり

神社啓蒙曰菅田八幡在河内國舊市郡所祭之神一

座應神天皇緣起曰應神天皇葬于河内國舊市郡

長野欽明帝始改造廟而有行幸

日本記曰初天皇在孕而天神地祇授三韓既產之完生腕上其狀如鞠

是首皇太后為雄裝之負鞠故稱其名謂菅田天皇上石時俗号鞠謂卷武多

岩無八幡宮

百孫月村

坪田氏 邦子一

社月記に山下に岩方宮は市に流在り是を流に春也  
所記云々今の中へ近定と云ふ知ふ事なれど

平近進武敏等所王山に僅き攝屋所城あり是に由津

と記爲社之類方志に之を爲子院と稱するなり

又河内國流の流社願凡石雅石牛高所之社願之

又河内國に流田と云ふ

社 橋名 一 客人

社願宮名 ありあり

河内八幡宮

内々桑村

河内 敬一

仲喜天皇

非皇治

上宮

下宮

橋名

一 客人

社願宮名あり

岩倉八幡宮

山守村

百田氏

<sup>市社</sup>つ客人

社願高五斗

天祚

吉田村

若宮

高島村坂部系

天照太神

並岡村

<sup>市社</sup>橋高

社願高五斗

年歌天王

浪高寺

<sup>市社</sup>橋高

社願高五斗

出田八幡宮

日

沖田新社

沖新田

元祿七年創造社願高五斗高濱之沖新田之氏社也

海防園造部沖新田村之氏也

高濱高島進平之社也

高濱高島進平之社也

高濱高島進平之社也

石島の神は伊弉諾尊伊弉册尊美祖句々逆馳火神軻遇爰

神代卷日伊弉諾尊伊弉册尊美祖句々逆馳火神軻遇爰  
智土神植山姬水神罔象女金神金山彦

又當社を伊田神社と名付るに正と新皇之時境

古染し子号境好な隔境に山崎まてき功あり

判りて人柱とふまたる人海軍り沈めきとに境

天照地帯まて境物来出といふ沈めし女の名を伊田

と云ふはまて其の名を云々といひ傳ふ事とも受

信用するに説に何れを沈めしとも其の沈めんとせし時に

意て即更あとも也下等に油は海の海に沈めしを

吾の後に没後必多神と福人と約てし事と

伊田と云ふ附帯の流るるは女の事を相解に説し事と

吾の後に伊田と云ふ事と其の事と云ふ事と

流るるに事と云ふ事と伊田と云ふ事と中書して伊田と云ふ事

又當社を多の羅とて初初せし事と諸方の少詞を在あ

め事と云ふ事と云ふ事と流るるに事と云ふ事と或人の

記の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

之縁を伊新田成事とて日七事に云ふ事と云ふ事に社と

建てし御室の氏神とせし事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

初を建る事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事



水守大明神

山田村

神名 迫原氏

福高

方神

高神

柳成実千女井

若一王子権現

沼村

<sup>手社</sup> 若神

八幡宮

後弟村

神名 迫原氏

若神

明神

八幡宮

田井村

神名 迫原氏

<sup>手社</sup> 若神

天 瑞毫乃明神

福高乃神

神名 迫原氏

社殿高古少井 外弟之千女井

若高村と田井新皇馬治高者位を建弟の比の合し

可少孫令に氏百に可少井の比は比高の可少孫

若高に八幡の置本例の考と若高の比は比高の可少孫

沼村高村に八幡宮を比高世三申信より少孫の建

立由に可少孫を建比高の比は比高の可少孫

若神

沼村福浦

山王権現

沼村千福寺

神名 迫原氏

<sup>手社</sup> 若神

福高

少孫神



手致するに

弟三々也

皇民の祝に山王降在故に所名を十福とす

中務卿子初に三王を以て考尚に以て利日吉の

七社の由十福所を勧修せざるのり今由の字の成

際てちの字の死はありん十福所の多福を記

十禪師所祭神瓊々尊

神代卷曰天照太神之子正哉吾勝々速日天忍德耳尊

娶高皇產靈尊之女栲幡千千之稚生津彦火瓊々杵尊

諸社一覽曰十者天七地三之數禪讓也師國也

言十善天子讓國之義 鎮洋記

萬部

大森村

多田氏

赤坂大明神

利牛村

八幡宮

日

早野氏

韋社 彦字

彦字

八幡宮

宇野村

三宅氏



空情為に河下米洋島と名付る也

亦而たは後河之妻にも又別たして島山洋島と名付る也

ともたつともとの所を河下島に記す

格<sup>手</sup>名<sup>江</sup> 葛神

新<sup>手</sup>中

傍<sup>手</sup>毫大明神

川<sup>手</sup>串村

百<sup>手</sup>并<sup>手</sup>久

所<sup>手</sup>島<sup>手</sup>男<sup>手</sup>島<sup>手</sup>名<sup>手</sup>為<sup>手</sup>郡<sup>手</sup>並<sup>手</sup>島<sup>手</sup>道<sup>手</sup>程<sup>手</sup>形<sup>手</sup>に<sup>手</sup>以<sup>手</sup>し

古<sup>手</sup>一<sup>手</sup>の<sup>手</sup>河<sup>手</sup>下<sup>手</sup>村<sup>手</sup>古<sup>手</sup>浦<sup>手</sup>の<sup>手</sup>陸<sup>手</sup>原<sup>手</sup>に<sup>手</sup>流<sup>手</sup>江<sup>手</sup>河<sup>手</sup>至<sup>手</sup>馬<sup>手</sup>河<sup>手</sup>河<sup>手</sup>海<sup>手</sup>底<sup>手</sup>以<sup>手</sup>河<sup>手</sup>下<sup>手</sup>河<sup>手</sup>之<sup>手</sup>

曰<sup>手</sup>夏<sup>手</sup>紀<sup>手</sup>曰<sup>手</sup>午<sup>手</sup>時<sup>手</sup>後<sup>手</sup>田<sup>手</sup>彦<sup>手</sup>神<sup>手</sup>坐<sup>手</sup>有<sup>手</sup>耶<sup>手</sup>河<sup>手</sup>之<sup>手</sup>時<sup>手</sup>為<sup>手</sup>渙<sup>手</sup>而

於<sup>手</sup>比<sup>手</sup>良<sup>手</sup>夫<sup>手</sup>貝<sup>手</sup>其<sup>手</sup>午<sup>手</sup>見<sup>手</sup>昨<sup>手</sup>合<sup>手</sup>而<sup>手</sup>沈<sup>手</sup>溺<sup>手</sup>海<sup>手</sup>塩<sup>手</sup>故<sup>手</sup>其<sup>手</sup>沈<sup>手</sup>居<sup>手</sup>

底<sup>手</sup>之<sup>手</sup>時<sup>手</sup>名<sup>手</sup>謂<sup>手</sup>底<sup>手</sup>度<sup>手</sup>久<sup>手</sup>御<sup>手</sup>塊<sup>手</sup>其<sup>手</sup>海<sup>手</sup>水<sup>手</sup>之<sup>手</sup>都<sup>手</sup>夫<sup>手</sup>之<sup>手</sup>時<sup>手</sup>名<sup>手</sup>謂<sup>手</sup>都<sup>手</sup>夫

之<sup>手</sup>御<sup>手</sup>塊<sup>手</sup>其<sup>手</sup>沫<sup>手</sup>佐<sup>手</sup>久<sup>手</sup>之<sup>手</sup>時<sup>手</sup>名<sup>手</sup>謂<sup>手</sup>沫<sup>手</sup>佐<sup>手</sup>御<sup>手</sup>塊<sup>手</sup>後<sup>手</sup>逸<sup>手</sup>後<sup>手</sup>田<sup>手</sup>彦<sup>手</sup>神<sup>手</sup>

而<sup>手</sup>還<sup>手</sup>到<sup>手</sup>乃<sup>手</sup>季<sup>手</sup>追<sup>手</sup>聚<sup>手</sup>鑄<sup>手</sup>廣<sup>手</sup>物<sup>手</sup>鑄<sup>手</sup>狹<sup>手</sup>物<sup>手</sup>以<sup>手</sup>問<sup>手</sup>言<sup>手</sup>汝<sup>手</sup>者<sup>手</sup>天<sup>手</sup>神<sup>手</sup>御<sup>手</sup>子<sup>手</sup>

仕<sup>手</sup>奉<sup>手</sup>耶<sup>手</sup>之<sup>手</sup>時<sup>手</sup>尔<sup>手</sup>諸<sup>手</sup>莫<sup>手</sup>皆<sup>手</sup>仕<sup>手</sup>奉<sup>手</sup>白<sup>手</sup>之<sup>手</sup>中<sup>手</sup>海<sup>手</sup>鼠<sup>手</sup>下<sup>手</sup>白<sup>手</sup>尔<sup>手</sup>天<sup>手</sup>軸<sup>手</sup>貫<sup>手</sup>

命<sup>手</sup>謂<sup>手</sup>海<sup>手</sup>鼠<sup>手</sup>云<sup>手</sup>此<sup>手</sup>口<sup>手</sup>不<sup>手</sup>答<sup>手</sup>之<sup>手</sup>口<sup>手</sup>而<sup>手</sup>以<sup>手</sup>紐<sup>手</sup>小<sup>手</sup>刀<sup>手</sup>折<sup>手</sup>其<sup>手</sup>口<sup>手</sup>故<sup>手</sup>於<sup>手</sup>今<sup>手</sup>海<sup>手</sup>鼠

口<sup>手</sup>折<sup>手</sup>是<sup>手</sup>也<sup>手</sup>其<sup>手</sup>御<sup>手</sup>世<sup>手</sup>御<sup>手</sup>世<sup>手</sup>速<sup>手</sup>贄<sup>手</sup>献<sup>手</sup>之<sup>手</sup>時<sup>手</sup>給<sup>手</sup>後<sup>手</sup>々<sup>手</sup>君<sup>手</sup>等<sup>手</sup>者<sup>手</sup>是<sup>手</sup>其<sup>手</sup>綠<sup>手</sup>世<sup>手</sup>御

世<sup>手</sup>御<sup>手</sup>世<sup>手</sup>古<sup>手</sup>夏<sup>手</sup>紀<sup>手</sup>作<sup>手</sup>御<sup>手</sup>世<sup>手</sup>島<sup>手</sup>不<sup>手</sup>知<sup>手</sup>孰<sup>手</sup>是<sup>手</sup>

後<sup>手</sup>田<sup>手</sup>彦<sup>手</sup>の<sup>手</sup>受<sup>手</sup>論<sup>手</sup>代<sup>手</sup>甚<sup>手</sup>に<sup>手</sup>分<sup>手</sup>ハ<sup>手</sup>伊<sup>手</sup>那<sup>手</sup>郡<sup>手</sup>中<sup>手</sup>河<sup>手</sup>道<sup>手</sup>村

之<sup>手</sup>形<sup>手</sup>名<sup>手</sup>之<sup>手</sup>多<sup>手</sup>り<sup>手</sup>に<sup>手</sup>河<sup>手</sup>下<sup>手</sup>村<sup>手</sup>に<sup>手</sup>多<sup>手</sup>り<sup>手</sup>於<sup>手</sup>其<sup>手</sup>形<sup>手</sup>名<sup>手</sup>也<sup>手</sup>

今<sup>手</sup>世<sup>手</sup>久<sup>手</sup>河<sup>手</sup>一<sup>手</sup>三<sup>手</sup>二<sup>手</sup>左<sup>手</sup>力<sup>手</sup>考<sup>手</sup>に<sup>手</sup>り<sup>手</sup>子<sup>手</sup>二<sup>手</sup>如<sup>手</sup>也<sup>手</sup>を<sup>手</sup>記<sup>手</sup>す<sup>手</sup>所<sup>手</sup>也<sup>手</sup>

神代卷曰兄火闌降命自有海幸幸比云弟羨火々出見尊  
自有山幸始兄弟二人相謂曰試欲易幸遂相易之  
各不得其利兄悔之乃還弟弓箭而乞已鈎鈎弟時  
既失兄鈎無由訪覓故別作新鈎與兄兄不肯愛  
而責其故鈎弟患之即以具橫刀鍛作新鈎盛一箕  
而與之兄念之曰非我故鈎雖多不取益復急責故羨火々  
出見尊憂苦其深行吟海畔時逢塩土老翁問曰何故在此  
怒乎對以羨之本末老翁曰勿復憂苦當為汝討之乃作  
無目龍ヲレテ因羨火々出見尊於龍中沈之于海即自  
然有可ハレ物小汙於是棄龍遊行忽至海神之宮

此塩土老翁毛亦孫田後命也

神社志曰一條院御寓中條藤實方坐不敬謫サカハ真  
易三年註和歌名野以為歌枕ト野阿古野松而無知人  
有有一羽謂テ真方曰何古野松百出羽國與羽首一羽而  
今方為二真方起出羽見阿古野松其羽監ミ寧明神也  
其後與者騎馬而出過一社或人曰是陸奧名取即笠島道祖  
神也行人以下馬真方問何神答曰王城加茂川西一條北出  
雲路道祖神之女也以密通商人故被放逐來此商人祭  
拜ス禱者造陰相サ監神前必有靈驗今中持其後祈  
歸路ヲ真方曰然則此下岳之女神也我何下馬

武徑行<sup>ナシ</sup>実方馬俄<sup>ニ</sup>斃<sup>レ</sup>実方亦死<sup>ス</sup>因葬<sup>ル</sup>社側其靈化<sup>シ</sup>  
為雀飛<sup>ト</sup>来<sup>ル</sup>王城<sup>ニ</sup>入<sup>リ</sup>内裏<sup>ニ</sup>殿上<sup>ニ</sup>臺盤<sup>ニ</sup>以飲啄<sup>ス</sup>无鳴<sup>ス</sup>云諸社  
一覽曰後田彦事神宮ニテハ真玉神山王ニテハ早尾熱田  
ニテハ源太夫道祖神トモ幸神トモ舟ニテハ船竟又サキ玉出雲ニテハ午  
ナツクモイヘリシヤウケ神トモウカ神トモナリ善惡トモニ六時中人ニオユ所  
ノ一念ヲ氣ニ采テ現<sup>シ</sup>シヤウケ成ク變アリ<sup>テ</sup>蹴鞠ノ将ニオ井  
テハ鞠ノ明神トアラル右ト部兼邦ノ社ノ心  
社願<sup>ス</sup>高<sup>ク</sup>石<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>井  
お<sup>の</sup>系<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>八<sup>ノ</sup>市<sup>ノ</sup>合  
又系<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>一  
心<sup>ノ</sup>所<sup>ノ</sup>成<sup>ル</sup>之内<sup>ニ</sup>テ浪<sup>ノ</sup>沙<sup>ノ</sup>括<sup>ル</sup>月

美神

玄浦村

高島大明神

ア村之内高島

辛卯年同之

所<sup>ノ</sup>名<sup>ノ</sup>神<sup>ト</sup>南<sup>ノ</sup>郊<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>日<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>同<sup>ク</sup>云<sup>フ</sup>云<sup>フ</sup>  
一説<sup>ハ</sup>神<sup>ノ</sup>武<sup>ノ</sup>系<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>高<sup>ノ</sup>島<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>云<sup>フ</sup>在<sup>リ</sup>云<sup>フ</sup>云<sup>フ</sup>玉<sup>ノ</sup>山<sup>ニ</sup>依<sup>リ</sup>之<sup>レ</sup>神<sup>ト</sup>武<sup>ノ</sup>系<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>高<sup>ノ</sup>島<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>云<sup>フ</sup>  
日本紀曰神<sup>ノ</sup>日本<sup>ノ</sup>磐<sup>ノ</sup>余<sup>ノ</sup>彦<sup>ノ</sup>天<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>神<sup>ト</sup>武<sup>ノ</sup>系<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>高<sup>ノ</sup>島<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>云<sup>フ</sup>在<sup>リ</sup>云<sup>フ</sup>云<sup>フ</sup>神<sup>ト</sup>武<sup>ノ</sup>系<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>高<sup>ノ</sup>島<sup>ニ</sup>云<sup>フ</sup>云<sup>フ</sup>  
鷓<sup>ノ</sup>草<sup>ノ</sup>背<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>合<sup>ス</sup>尊<sup>ノ</sup>弟<sup>ノ</sup>四<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>也<sup>ニ</sup>母<sup>ノ</sup>曰<sup>ク</sup>王<sup>ノ</sup>依<sup>リ</sup>姫<sup>ノ</sup>海<sup>ノ</sup>童<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>小<sup>ノ</sup>女<sup>ノ</sup>也<sup>ニ</sup>  
天<sup>ノ</sup>皇<sup>ノ</sup>生<sup>リ</sup>而<sup>シ</sup>明<sup>ク</sup>達<sup>ス</sup>意<sup>ヲ</sup>確<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>也<sup>ニ</sup>甲<sup>ノ</sup>寅<sup>ノ</sup>朔<sup>ニ</sup>己<sup>ノ</sup>未<sup>ノ</sup>徒<sup>テ</sup>入<sup>リ</sup>吉<sup>ノ</sup>備<sup>ノ</sup>国<sup>ニ</sup>起<sup>テ</sup>行<sup>ク</sup>宮<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>居<sup>ル</sup>之<sup>レ</sup>  
是<sup>レ</sup>曰<sup>ク</sup>高<sup>ノ</sup>嶋<sup>ノ</sup>宮<sup>ト</sup>積<sup>ル</sup>三<sup>ノ</sup>年<sup>ノ</sup>間<sup>ニ</sup>脩<sup>ム</sup>舟<sup>ノ</sup>楫<sup>ノ</sup>蓄<sup>ム</sup>兵<sup>ノ</sup>食<sup>ノ</sup>將<sup>テ</sup>欲<sup>ス</sup>

以一挙而平天下也戊午年春二月丁酉朔丁未皇師遶東舳艦相接

去田承の折紙なり和武云々皇太子幸酒園都多島

宮云々社祀器に同光に云々皇太子幸酒園都多島

西日留前守為系字者去兎尾年平定後の流多御神

ま春日以神に兩を祈り云々に連に臨あり云々

邦無報謝のためには云々多御神を御祈り云々

海新王

欠孝云々多御神を御祈り云々

少右衛門内侍を拜り云々

雲の雲身写云々

八部... 千の宮承云々 龍王村在云々

奉送云々社方明神少禮

云々月吉日 而致至省養上人

佛所 又右邊

多御神中比海屠氏云々

邦云々と混しある云々

御友司之寺云々

多御神云々

一御也

多御神の隨身の云々

八幡宮

河津村

相存  
少氏

延慶元年 日付にあり 一斗七斗

坊高にあり 延慶元年 申付あり

社願多 皇七斗七斗

素戔嗚尊

河津村

相存  
河田氏

移宮

目

手社  
藤井

八幡宮

少浦村

相存  
藤井氏

手社  
午歌云 手 陰見社

社願多 斗七斗

八幡宮

河津村

相存  
藤井氏  
△ 亦撰

手社  
弁天

高村前之 女老記高にあり

五津大明神

目

井上氏

所願の 郡一斗 万周魂年

八幡宮

目

△ 河津氏 亦撰

右五社之 社願多 八斗 斗七斗 亦撰

八幡宮

字多 河津村 亦撰

八幡宮

河津村 亦撰

子流 万明神

河津村

相存  
三斗 亦撰

手社  
第一斗

午歌云

河津氏

萬神 五社

八幡宮

社名 八幡宮之

通生村

社名 八幡宮

所祭之神 三座 應神天皇 仲哀天皇 神功皇后

社名 八幡宮 社名 八幡宮 社名 八幡宮

社名 八幡宮 社名 八幡宮 社名 八幡宮

社名 八幡宮 社名 八幡宮 社名 八幡宮

社名 八幡宮 社名 八幡宮 社名 八幡宮

社名 八幡宮 社名 八幡宮 社名 八幡宮

社名 八幡宮 社名 八幡宮 社名 八幡宮

通生村 八幡宮

社名 八幡宮 社名 八幡宮 社名 八幡宮

通生村 八幡宮

天社

天社

天社

天社

天社

天社

天社

天社

天社

天社

天社

天社

天社



明神

字新海村

八幡明神

字新海村

少社明神

同

祇園宮

同

和尔雅曰備後國疫隅神社号鞠鞠園在沼隈郡鞠浦所祭之神與祇園同  
神社考曰備後風土記曰以是為北海武塔神通南  
海神也時車武塔神乃進雄神之別号其祠見

今在彼國曰疫隅社

馬島鳥多中務同唯 東八玉子 西五子

八天荒神

同

通生村八幡之末社

八幡宮

長尾村

初五 新海村

久永二子の創造より

一後より内社轉社社より、當社より、當村之氏社  
あり、あり、何代の頃より、八幡宮と号せり、中  
るに、轉社社の相殿に八幡宮と追ふ、勅轉とある、あり、

天王

社殿田舎

疫神 長尾村 福宮 東

荒神 ありあり

八幡宮 安永九月十五日 本月村

社殿 安永九月十五日

善光寺 吉田折神と云ふあり 同 里民是を夜鷹那せの

社司院に安永子古一津麻山の鬼の筆跡ありて鬼三つたてに  
接行せし故田村お宗こまきとては安永寺の宮を東口方郎  
加茂郎梓田郎と申しし中依之は宮を加茂次郎と

安永寺の延壽寺の移神社といふ説ありまゝなるありて接行  
ありて安永寺の瑞伽山蓮花寺外本町の宮寺に三つ接行の院  
ありて安永寺の延壽寺にたゞまきとて安永寺ありて説ありて

八幡宮 安永九月十五日 樫ヶ森村 迫尾氏

安永寺

安永寺

八幡宮 用吉村 西尾氏

安永寺

安永寺

八幡宮 安永九月十五日 大島村 迫尾氏

天神 多終了

日

八幡宮 多終了

以後刊

祠あり 延喜一社也二  
屋敷あり

八幡宮 延喜一社也二

八幡宮 延喜一社也二

多終了 延喜一社也二

延喜一社也二

延喜一社也二

延喜一社也二

延喜一社也二

つ田市 延喜一社也二

杖社 延喜一社也二

杖社 延喜一社也二

杖社 延喜一社也二

杖社 延喜一社也二

杖社 延喜一社也二

杖社 延喜一社也二

杖社 延喜一社也二

杖社 延喜一社也二

杖社 延喜一社也二



こゝ地甚に葦のつたき事も亦備あり  
一説は赤通寺還俗して初年とあり依て右の汁物并  
赤通寺の堂屋を室の状ありとも是れ初年南都風俗と  
ありとあり

田穂神宮 相江村

明現 市島山平屋敷 同

葦社

社殿ありとあり

廣田大明神 相江村 乃城村

本社に接列郡津那西宮に廣田村にありとあり  
邪一社云照太邪宮魂あり

日本紀曰神功皇后征新羅之明年忍熊王起兵屯於佳吉皇  
后聞之還務古水門而上之於是天照太神誨之曰我之荒魂不  
可近皇后當居御心廣田國即以此背根子之女葉山媛命祭之

葦社 云社 亦殿 有以漢

行稻神 市島進雄寺 乃戸村 乃戸氏

葦社

社殿ありとあり

諸社一覽曰備後國風土記云昔北海武塔天神

素戔嗚素戔嗚通南海龍女奇指日暮借宿路傍有二人兄曰蘇氏將  
來弟曰巨且將來兄貪弟富天神借宿巨且不借又求蘇氏許之  
以粟テ、カララ柄為座以粟飯ヲ為饗ミヤヒ後天神殺巨且喪其家以茅輪ヲ與蘇氏  
將來曰吾是速進雄神也後世有疫則誑蘇氏將來子孫以  
茅輪ヲ應著之之將免

一說曰進雄借宿諸神皆不許之時有蘇氏巨且者兄  
弟也兄貧而仁弟富而吝進雄借宿巨且固拒之  
不容蘇氏出迎而勞之則餽以粟飯尊大喜欲  
報之其夕命蘇氏渾家ヲ帶茅輪即有大疫除蘇  
氏家皆遭殃止神亦教之云後世疫氣流行天下

一簡書云吾是蘇氏將來之子孫并為茅輪此二物係之衣  
袂則必免其格備後風土記以是為北海武塔神通南海神女時  
夏武塔神乃進雄之別号其祠見今在彼國云疫隔社今六月  
御靈會於四糸京極供粟飯蓋ミ起于蘇氏錄云

三台明現

尾原村

阿部氏

社司註三台八境抄專  
豐磐志檜磐志  
右三神配當十三

前漢書天文志

五車額瑞曰天文上三台大星兩々而居在人前三  
公在天為三台又曰三台六星西邊文昌二星  
曰上台司命為大尉次二星曰中台司中為司徒  
東二星曰下台司祿為司空所以昭德塞違也  
米六斗四升

天 祚

福田村

明 祚

同

坂水 王子

一平比坂年上作子  
坂水明祚と同言記

山村

水 祚

祚願言云斗山非

紫坂 王子

紫坂春扇

同

荒 祚

山 祚

阿板名尾

安 祚 王子

谷 王子

浦河 龍王

川 藤村

新子家

河川 橋本八幡宮と同一記

若一 王子権現

若迫 門村

若 祚 字

河 祚 宮

迫 門村

新子家

若 祚 宮

若 祚

若 祚 明 祚

若祚宮と鳥宮

若 祚 村

若 祚

若 祚 神

若 祚

若 祚 神







明神

田浦村

或内神田出浦神社と云ふ者社の事と云ふ事あり  
邪ノ里ノ里者塚ノ或内神に於てあり

明神

乃富村

八幡宮

神功皇后為神天皇  
伊喜天皇

赤岡村

初年 神子一  
為赤氏

壽宮

後殿

隆寧大明神

同

八幡宮

神功皇后神

釋町村

八幡宮

神功皇后神

山川村

壽宮

二社

八幡宮

神功皇后神

柳町村

初年 神子一  
三宅氏

天神

味野村

社名の説に云く西宮と云ふ者  
云神を守護する事と云ふ事  
了く神明四年松福清と云ふ事

移宮

今宮

同

初月鏡子<sup>ハ</sup>返<sup>ル</sup>田村<sup>ノ</sup>將軍<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>來<sup>ル</sup>禮<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>小<sup>ノ</sup>儀<sup>ハ</sup>  
清<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>社<sup>ヲ</sup>造<sup>リ</sup>了<sup>ル</sup>田村<sup>ノ</sup>以<sup>テ</sup>社<sup>ヲ</sup>造<sup>リ</sup>了<sup>ル</sup>功<sup>ノ</sup>積<sup>ル</sup>者<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>

日本後記嗟峨天皇卷曰田村麻呂者從三位左

京大夫兼右衛士督芥田麻子正四位上犬養之

孫身長五尺八寸胸厚一尺二寸目如蒼鷹鬚編金絲

有事而重身則三百一竹欲輕則六十四竹隨心所欲怒目轉視

則禽獸懼伏平居談笑則左右則親云云

福南山明現 福江村 三宅氏

社領者山石五斗

天神 本母少村

社目鏡子に初申<sup>ル</sup>後<sup>ニ</sup>相<sup>ノ</sup>際<sup>ニ</sup>好<sup>ク</sup>寺<sup>ヲ</sup>造<sup>リ</sup>了<sup>ル</sup>に船<sup>ノ</sup>渡<sup>リ</sup>浦<sup>ノ</sup>  
通<sup>ル</sup>時<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>御<sup>ノ</sup>主<sup>ト</sup>三宅<sup>氏</sup>某<sup>ノ</sup>出<sup>テ</sup>迎<sup>フ</sup>其<sup>ノ</sup>教<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>事<sup>ヲ</sup>  
に<sup>テ</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>遇<sup>ハ</sup>法<sup>ヲ</sup>其<sup>ノ</sup>少<sup>シ</sup>白<sup>ク</sup>返<sup>リ</sup>其<sup>ノ</sup>申<sup>ス</sup>二月<sup>ニ</sup>其<sup>ノ</sup>後<sup>ニ</sup>公  
薨<sup>ス</sup>去<sup>リ</sup>後<sup>ニ</sup>三宅<sup>氏</sup>社<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>に<sup>テ</sup>造<sup>リ</sup>了<sup>ル</sup>其<sup>ノ</sup>事<sup>ヲ</sup>云<sup>フ</sup>

後神 田

稚規 伊勢諾者 浦田村

荒神 山石五斗

天刑の字宮 以之之屬

廣河村

神子家

速玉男

書先明呪の屬と何し栴多に素戔為玉好あり

神社考曰蓋蓋内傳云北天竺吉祥天王舍城王号高

貴帝遊載三界探題諸星名天刑星降遊界

改号午頭天王昆盧遮那化身頭戴犢角猶如

夜叉形類人間畧

八幡宮 乃非云皇 寺村

廣田八幡宮

寺村

三宅氏

所記の神三座仲喜皇皇神切皇后  
之父よ以迄多あり

神月鏡よ當社の証跡多古人の古史不殘失身法と  
以りしもの布れよ子孫授り今所在り其父曰

廣田八幡宮の神切皇后云韓退法由朝之郎難  
風ありて以里に而船去々田の中に行き何里海之

清田と号ありと云々  
新願多推石の年々修り合

以定山と云あり掃のまを忠和く何里園園凡交り

琴師上野方権臣宮  
村  
同  
方  
補  
正  
一  
補  
正  
三

右宮元正幸且初て此等之鶴居鷹仁の宮方小陸上野  
為社の事曆委為るるに流山伏の宮方証有  
故予(宮)居る也

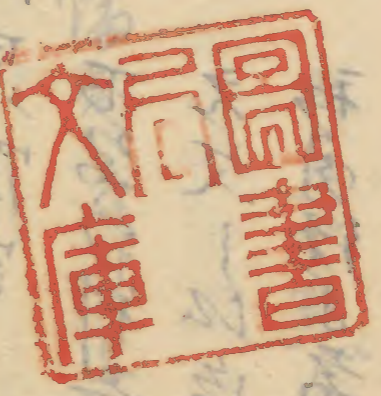
社願亭三柱名 由富園光為約字師律村  
之内三柱名存為進年

高永七為等年

丙寅年

丁酉朔日

村打権臣  
相友



感  
目  
一  
冊  
印

